

村岡は、「我が国の思想史上頗る注意すべき、独自の神学的哲学的思索の試みや、特殊の思想的発展の歴史」を認め、そこに存在した思想的発展の可能性を惜しんでいる。

篤胤におけるキリスト教のかかる影響については、その後伊東多三郎や海老沢有道らによって研究が深められ、子安宣邦らに至るこれを強調する研究の流れがある一方で、三木正太郎らのようなこれを強調しない論者もあつて、立場が分かれている。篤胤の死後審判に関する議論が、『鬼神新論』・『靈能真柱』と、『本教外篇』・『古史伝』とで、相違があることが、この立場の違いと関わっている。

ところが近年、平田家資料の調査に基づく宮地正人や吉田麻子の研究が登場し、篤胤における西洋イメージの再評価や、諸本検討を踏まえたテキスト分析の必要性が意識されるようになった。篤胤学におけるキリスト教の影響も、「本教外篇」の諸本検討に基づいて研究を進めるべき段階にあるように思われる。

村岡はまた、佐賀藩の南里有隣も同様の視点から論じている。福善禍淫を認めて来世教的性格を徹底させ、また神の愛を強調した有隣説を、宗教的発展として高く評価するとともに、その背後にやはりキリスト教思想の影響を見た。その論拠が「神理十要」におけるプロテスタント教理書『天道溯源』の受容である。

その後、戦時下の諸研究は有隣におけるキリスト教思想の影響を無視し、戦後の吉田寅による『天道溯源』受容の実証も有隣そのものを論じたものではなかった。長い研究の停滞を打ち

破ったのは、前田勉による、有隣の記紀注釈の紹介、また「神理十要」と『天道溯源』の比較分析——有隣に受容できなかったのがキリストの復活と信仰義認論であることが明らかになった——である。篤胤研究同様、資料調査に基づくテキスト分析によって研究の進展が展望されているのである。

その点を強調するべく最後に、これまで存在が知られてこなかった有隣の著作を紹介した。

堀秀成の思想と行動——平田派国学者の視点から——

小林 威朗

本発表は明治維新以後、宣教使・教導職として活躍した堀秀成について、特に明治維新以前からの連続性に注意を払いながら、その思想と行動を明らかにするものである。

先行研究を概観すると、まず膨大な著書の紹介するものがあり、その後河野省三による著述分類が行われている。その後の研究はその枠ないで研究されているように思われる(例えば、講釈師としての側面、和歌に依る教化とその内容)。また近年、錦仁による日記の分析が進められている。しかし、いずれの研究においても常世長胤が『神教組織物語』において述べた「堀氏ハ稚キ時ヨリ身持悪キ為古河藩ヲ脱シタル後ハ軍談ナドヲセシ人ナレバ、講義ハナレテ上手ナリ」という評価の影響を強く受けており、この評価自体を問い直した研究はないように思われる。また、堀の思想の根幹であると考えられる古典解釈(神道思想)についても言及している研究は管見の限り見当たらない。

そこで本発表では、気吹舎とその門人(常世以外)がどのようにに堀を評価していたかを出発点とした。気吹舎日記中の安政四年六月条には、堀が水戸藩へ取立てられる際に平田鍊胤が仲介していたことが記され、その子延胤は「堀は篤学謹行之学」と評価したうえでこのころすでに講説の力量も高く評価されているとしている。また安政五年以降と考えられる書簡には、門人何某が堀の著作である『醜の御楯』を読み、堀に興味を持ち問い合わせている。また『醜の御楯』は気吹舎門人が待ち望んでいた「武学本論」に先んじて著された書と映ったようである。

次に堀の古典解釈について『古伝顕幽考大綱』から分析した。彼は「古伝」には「三段ノ御依」と「十段ノ顕幽」があり、それは「経」と「緯」であるとした。そしてこの「顕幽」の世界観の中で、万物起原を「根国」(地中)に求める説をとる。このことは後の宣教使において教義確立の際に問題となる。『泉國所在説略附紙答』(國學院大學所蔵、明治三年)には当時宣教使であった堀と伊能穎則の問答が記されている。そこにはヨミは地中である事を主張する堀と、月であることを主張する伊能の対立が記されている。それと同時に、古典解釈(神道思想)から国民を教化しなければならないという共通の理念も見出される。

堀をある種の教育者として着目した研究に岡田哲「幕末の神道講師堀秀成」がある。この研究をもとに嘉永期の『満奈肥廻則』から分析した。これは富樫広蔭の私塾言幸舎の「学則」を模倣したとされるが、その附録には堀自身の経験から作成した学問階梯が示され、同学後学の者への道標としている。また、

安政四年『醜の御楯』は、水戸斉昭へ提出した武士の心得を書いたものであるが、その内容には武士のみならず庶民にいたるまで学問を修める必要を説く。そして明治期の建白書では、「巡教諭使」という大宝元年の明法博士を典拠とする使節を設け、都鄙に拘らず「御一新」の趣旨を理解させるべきとした。

以上、堀秀成の思想と行動に関して、平田派国学者の視点を出発点として概観してきたが、常世の言説以上のものが示されたように思われる。特に講義に関して「上手」であったのは、長年にわたり講義を継続してきたからであり、その結果水戸藩士の目にとまることとなったと考えるべきであろう。また、明治二年の建白や宣教使期の言説は、これまで平田派の独断、もしくは平田派と津和野派の対立として捉えられがちであった明治維新政府による神祇・宗教政策に関する研究に新たな示唆を与えてくれるものと思われる。

宮地神道とは何であったのか

黒田 宗篤

宮道東夫の『玄学のガイドライン』シリーズ(玉廻舎塾)が出版されて以来、従来の「宮地神道」や「宮地神仙道」といった概念は、再検討を要するものとなった。これらの概念は、友清歙真、清水宗徳等といった新興宗教団体の組織者が、高知県潮江天満宮の神主職(宮司)世襲家の当主であった宮地常磐、再来(ヨリキ)父子と高知城内八幡宮社家の当主・宮地嚴夫の三氏の数ある著作の中から特に玄学研究に注目して、彼ら独自の解釈を付したものに由来するものであり、実際の三氏の思想